

当院における遷延性術後痛（Persistent Postoperative Pain）発症に関する縦断調査

1. 研究の対象

2008年1月～2009年12月及び2018年1月～2019年12月に当院の乳腺外科、呼吸器外科、整形外科及び心臓血管外科で手術を受けられた方

2. 研究目的・方法

遷延性術後痛（Persistent postoperative pain：PPP）は、術後3カ月以上持続する手術部位に限局した疼痛であり、感染や術前からの痛みなど他の原因を除外したものである。PPP発症リスクとして術式、年齢、心理的・精神的要因などが報告されているものの、国や施設によって報告内容にばらつきがある。近年においては、術式や医療機器の進歩や周術期の疼痛管理の改善に伴いPPP発症頻度も変化してきている可能性も考えられる。当院で過去に実施された手術を後方視的に振り返り、過去と現在および過去の報告を比較することで、PPPに関する新たな知見が得られると考えた。PPPに関する現状を整理し、特徴を見出すことにより、PPP発症の新たなリスク因子の発見や、発症予防に寄与できると考えた。当院の術後経過を後方視的に検索し、過去と現在および過去の報告等と比較することで、PPPに関する現状を整理することを目的とした。

当院で2008 - 2009年の2年間及び2018 - 2019年の2年間に実施した乳腺外科、呼吸器外科、整形外科及び心臓血管外科（胸骨正中切開したもの）における術中麻酔薬使用量、術式、麻酔法、術後痛及び術後3、6、12カ月後のVAS^{※1}（またはNRS^{※2}）、手術時間等の周術期や術後の疼痛に関するデータを後方視的に検索し、整理する。得られたデータを解析し、2008 - 2009年データと2018 - 2019年データや過去に報告された文献を包括的に比較検討する。

※1：VAS；Visual Analogue scale（視覚的アナログ尺度）

※2：NRS；Numerical rating scale…※1およびNRSいずれも患者さんが感じている痛みを数字で表したもの。評価の際は対象患者の侵襲は伴わない。

研究期間：

学校長承認後～令和3年12月31日

3. 研究に用いる試料・情報の種類

資料 3

術中麻酔薬使用量、術式、麻酔法、術後痛及び術後 3、6、12 カ月後の VAS（または NRS）、手術時間等の周術期や術後の疼痛に関するデータ等

4. お問い合わせ先

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。
ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。

また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としませんので、下記の連絡先までお申出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

所属・職名	防衛医科大学校病院麻酔科助教
研究責任者	諸橋 徹
連絡先	〒359-8513 埼玉県所沢市並木 3-2 防衛医科大学校麻酔学講座 04-2995-1511（代表） 04-2995-1692（直通）

-----以上